



二本松の菊人形 (霞ヶ城公園)

10月～11月中旬

菊の花が鮮やかさを増し、木々の紅葉も褪せず 10月中旬から 11月中旬にかけて、霞ヶ城公園を会場に開催される菊の祭典。昭和 30 年から始まり、多くの人に支えられてきた、二本松を代表する秋のイベントである。



針道の山車もみ (あばれ山車) (針道目抜き通り)

スポーツの日の前日 (2020 年は 10 月 11 日)

天正 13 年 (1585 年) からの祭りと言われ、現存する記録では宝暦 8 年にこの付近一帯が凶作や疫病に見舞われた際、人形を飾った山車や神楽稚子を奉納した記録が残っている。現在では毎年、スポーツの日の前日に開催され、若連作製の大型人形を飾りつけた山車が、豪快な太鼓の音が鳴り響くなか、激しいもみ合い (ぶつかり合い) を繰りひろげる。



八幡太郎伝説を訪ねて

八幡太郎義家 (源義家) は、鎌倉幕府を開いた源頼朝の曾祖父にあたり、また室町幕府を開いた足利尊氏の祖先にもあたることから英雄視され、様々な逸話が生まれています。ここ二本松市にも、そんな伝説に彩られた数々の場所があります。

二本松市街地から国道 459 号を東へ車で約 30 分。阿武隈のなだらかな山々を縫う道脇に、突然大きなしだれ桜が現れます。(写真 1) これが、三春の滝桜の孫桜とも言われる、『合戦場のしだれ桜』。八幡太郎義家と安倍貞任・宗任との合戦の場と伝わる地に立つ二本のペニシダレザクラが、満開の時期には周囲の菜の花の黄色ととも言われぬ彩りの競演をします。桜の開花時期にはライトアップもされており、昼とは違った艶やかな表情が楽しめます。合戦場の桜から国道 349 号に入り北上すると、『道の駅ふくしま東和』(P 12 参照) があります。周囲一帯はかつて養蚕業が盛んでした。

養蚕業を終えて眠っていた桑畑の資源を蘇らせ、現在では桑の実を使ったジャムや、桑の葉を使ったお茶、ジェラートなど、桑にちなんだ特産品を生産販売しており、人気となっています。この道の駅から西へ入った場所にあるのが白鬚宿。近くを流れる川は、義家が愛馬の汚れを落とすと伝えられ、『馬洗川』という名の由縁になっております。小さな滝が連続する景色は、一服の清涼感を味わわせてくれます (写真 4)。再び国道 349 号に戻り、北上すると正面に見えるのが木幡山。古くから神霊の籠もる山として信仰の対象になっていました。769 (神護

景雲 3) 年に安積国造の丈部継足が山中に隠津島神社を勧請したのが始まりと伝えられています。今に伝わる冬の風物詩、「木幡の幡祭り」(写真 2) は、前九年の役において敗走した源頼義・義家父子が、この山中に立て籠もり、弁才天宮に戦勝を祈願したところ、たちまち降雪があり、追ってきた安倍氏が雪に包まれた杉木立を源氏の標である白旗と見誤ったため、その多勢に驚いて退却した故事から始まったと伝えられています。杉の美林が全山を覆う木幡山は、林道で八合目まで車で行くことができ、途中の展望台からは安達太良連峰の山容を見渡すことができます。

祭 まつりを楽しむ

市内には、歴史あるお祭りがたくさん残されています。一年でもわずかその期間にしか見ることのできない「お祭り」には、地域の文化や歴史、気質などが凝縮されています。そんな各地の祭りに、ぜひ足をお運びください。

(この他は、巻末の年中行事をご参照下さい)



二本松の提灯祭り⇒P 3 木幡の幡祭り⇒P 6 をご覧ください。



万人子守地蔵尊例大祭 (小浜) 5月3日～4日

万人子守地蔵は、子どものいたずらから大水で流され、宮城県荒浜に打ち上げられているのを発見されて再び小浜に帰ってきたという言い伝えがあるお地蔵様。2日間にわたるこの祭りは、子どもたちの健やかな健康を願って盛大に執り行われる。この地では、今でも子どもの守り本尊として「子地蔵尊」を貸し与える風習が残り、子地蔵を里帰りさせ、新たに祈禱を受けるために多くの参詣者が訪れる。



塩松神社例大祭 (小浜の紋付祭り) (小浜)

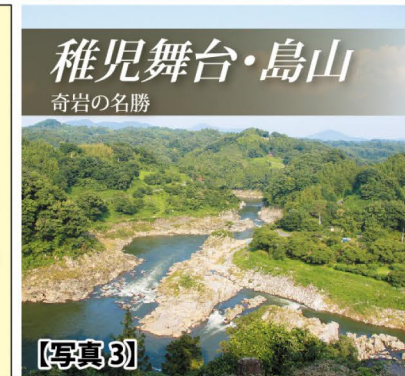
スポーツの日までの 3 日間 (2020 年は 10 月 10～12 日) 領主丹羽氏に御紋章三箇所の使用と神輿渡御が許可され、寛政元年 (1789 年) から始まった。2日目の本祭りで神輿渡御が行われる際に、若連全員が紋付羽織袴の正装をし、荘厳に行われることから、「紋付祭り」と言われるようになった。



【写真 1】



【写真 2】



【写真 3】



【写真 4】

義家伝説は、滅ぼされた側の安倍氏の伝説も二本松市に残っております。二本松市内を縦走する阿武隈川の、大きく蛇行する辺りを島山といひ、奇岩怪石が千変万化の景観を織り成す溪谷になっていて、別名『稚児舞台』(写真 3) と呼ばれています。この稚児舞台は、源義家に安倍軍が稚児の舞を見せようとした場所とされ、次のような悲話が残っています。奥州征伐にきた源義家の大軍が阿武隈川を挟んで奥州の豪族安倍貞任の軍勢と数十日も対峙し、弓矢の合戦を繰り返してました。1055 (天喜 3) 年春、

双方の兵が疲れ果てたある日、東岸の源氏勢が「奥州の豪族といえども、舞を舞う子女は一人もおるまい」と安倍勢をはやし立てます。安倍貞任は「それまで言われては一門の恥」と激怒し、二人の乙女を稚児姿に仕立て、大きな岩を舞台に舞を舞わせました。二人は花に戯れるチョウのように優雅に舞い、このときばかりは、川の瀬も群れ飛ぶ鳥の声も鳴りを潜め、兩岸の兵は天女のように舞い踊る娘たちにうっとり見とれ、喝采が沸き起こりました。ところが、舞い終わった二人は「生き恥をさらした」と抱き合い淵に身を

投げたといわれています。現在、稚児舞台(島山)は、全国でも指折りのカヌーコースとしても知られ、春には白く可憐なユキヤナギの花が、岩肌を美しく染め上げます。このほか、源義家一行が仮屋を作って野宿したことから「借宿 (かりやど)」、安倍軍が源義家軍を大軍と見間違え、後ずさったことから「至去 (しさる)」など、市内のいたるところに八幡太郎義家伝説由来の地名が残されており、地名にのみ留める伝説もまた、空想の旅を広げてくれます。